

透明猫

海野十三

青空文庫

崖^{がけした}下の道^{みち}

いつも通りなれた崖下を歩いてきた青二^{せいじ}だった。

崖の上にはいい住宅がならんでいた。赤い屋根の洋館もすくなくない。

崖下の道の、崖と反対の方は、雑草^{ざつそう}のはえしげった低い堤^{つつみ}が下の方へおちこんでいて、その向うに、まつ黒にこげた枕木^{まくらぎ}利用の垣^{かき}がある。その中にはレールがあつて、汽車が走っている。

青二は、この道を毎日のように往復する。それは放送局に働いている父親のために、夕食のべんとうをとどけるためだった。したがって、青二の通るのは夕方にかぎっていた。

その日も青二は、べんとうを放送局の裏口の受付にとどけ、守衛の父親から鉛筆を一本おだちゃんにもらい、それをポケットに入れて、崖下^{がけした}の道を引つかえしていったのである。あたりはもう、うすぐらくなっていた。

まだ春は浅く、そしてその日は曇^{くも}っていて、西空に密雲がたれこみ、日が早く暮れかけていた。

青二は、すきな歌を、かたつぱしから口笛で吹いて、いい気持で歩いていった。

そのとき、道ばたで、「にゃーお」と、猫のなき声があった。

青二は猫が大好きだった。この間まで、青二の家にもミイという猫がいたが、それは近所の犬の群れにかこまれて、むぎんにもかみ殺されてしまった。青二はそのとき、わあわあと泣いたものだ。ミイが殺されてから、青二の家には猫がいない。

「にゃーお」また猫は、道ばたで鳴いた。崖下の草むらの中だった。

青二は口笛を吹くのをやめて、猫の鳴き声のする方へ近づいた。

が、猫の姿は見えなかった。どこへにげこんだのだろうと思っていると、また「にゃーお」と猫はなかった。

青二はぎくりとした。というのは、猫のいないのは彼が草むらの方へ顔をつきだしているそのすぐ鼻の先ともいっていいほどの近くだったからである。

しかも、猫の姿は見えなかった。

青二は、うしろへ身をひいて、顔色をかえた。ふしぎなこともあればあるものだ。たしかに猫のなき声があるのに姿が見えないのである。

「にゃーおん」猫はまたなかった。青二は、ぶるつとふるえた。彼は、あることを思いつい

たのだ。

(これはひよつとすると、死んだミイのたましいがあらわれたのではないだろうか)

死人のたましいが出てくる話は、いくどもきいたことがある。しかし死んだ猫のたましいが出てきた話は、あまりきいたことがなかった。でも、今はそうとしか考えようがないのだった。

「おいミイかい」

青二は、思いきつて、ふるえる声で、そういつて、声をかけた。

「にやーお」返事が、同じところからきこえた。

「あつ！」青二は、おどろきの声をあげて、その場にすくんでしまった。というわけは、彼はそのとき、草の上に二つの光るものがういているのを見つけたからである。

それはなんだか、えたいの知れないものだった。ただびかぴかと光つて、行儀ぎようぎよく二つがならんでいた。大きさはラムネのガラス玉を四つ五つあわせたぐらいあつて、全体はうす青く、そしてまん中のところが黄色で、そのまた中心のところが黒かった。

(目玉のようだが、いったいなんだろう)

とたんに、また「にやーおん」とあまえるような声がきこえた。たしかにその二つの玉

のすぐそばから声が出たようである。

青二は、こわいはこわいが、その光った二つの正体を見きわめないではいられなかった。そこで、彼は勇気を出して、草むらの中へふみこむと、両手でその玉をぎゅつとつかもうと――。

「うわっ」青二は、いそいで手を引くと、その場にとびあがった。玉をつかむ前に、てのひら掌が、ごそごそとする毛のようなものにふれたからであった。

よつぽどそのへんでやめて、逃げだそうと思っただけでもともと青二は、ものずきなたちだったから、ふみとどまった。そしてもう一度、その二つの玉の方へ両手をもつていった。

「あ、――」ふしぎな手ざわりを、青二は、感じた。毛の密生した動物の頭と思われるものに、ふれたからであった。

ふしぎな発見

「……猫の頭のようなが、しかしそんなものは見えないではないか」なんとという気持ちの

わるいことだろう、と青二は思った。

しかしこのとき彼は、さつきとはちがつて、もうよほど落ちつきをとりもどしていた。もう一度その毛深い動物の頭にさわり、それから、おそろおそろの下の方へなでていった。

全くおどろいた。たしかに、猫と思われるからだがあつた。しっぽもあつて、ぴんぴんうごいていた。足のうらには、たしか猫のものにちがいない土ふまずもあるし、爪もついていた。しかしそれは全く見えないのであつた。

青二は、いよいよおどろいたが、もつとしらべをつづけた。

青二の目に見える二つの玉は、どうやらこの猫の目玉であるらしく思われる。

それから新発見があつた。見えない猫の二本の前足が、細いゴムのバンドで結むすんであることだつた。そのゴムのバンドは、草むらの中にあつて、よくよく見ないと、青二の目には、はいらぬ場所であつた。

こわいよりも、今や青二は、好奇心にわき立つた。

青二は、そのあやしい猫のような動物を抱きあげた。たしかに猫ぐらいの重さを感じられた。青二は、それをしっかりと抱いて、道へ出た。そして、自分の家の方へ歩き出した。その動物は、おとなしかつた。もうなきはしなかつた。青二のふところへ、もぐりこむ

ようにして、からだをまげた。動物の温あたたか味が青二の方へつたわって来た。

動物はねむり始めたらしい。

「いったいこれはなにかしらん。猫のたましいにしては、すこし変だし……」

青二には、このあやしい動物の正しょうたい体を、はつきりいいあてることができなかつた。

やがて青二は、家にかえりついた。

青二は「ただ今」といつて、すぐ二階へあがった。青二は、途中で拾ってきたあやしい猫みたいな動物のことを、母親に話をしようかと思つたが、いやいやそうでない、そんなあやしいものを拾つて来たことを、お母さんが知つたら、どんなにおどろくかしのれない。そして早くそのようなものは捨てておしまいといわれるだろう。それではせつかくこわい目をして拾つてきたのに、つまらない事になつてしまう。そう思つて青二は、その怪しい動物を抱いたまますぐ二階の自分の部屋にあがつてしまったのである。

二階へあがったものの、青二は、ちよつと困つてしまった。このあやしい動物をどこへおいたらいいかということだ。そのままおいておけば、きつと出ていつてしまうだろう。逃げられたんでは、いやだ。

戸棚とだなに入れようか。いや、猫はふすまを破ることなんか平気だから、戸棚では安心なら

ない。

「青二や。なにをしておいでだい。ご飯ですよ。早くおりていらっしやい」

はしご段の下から、母親が二階へ声をかけた。

「はーい。今行くよ」

さあ、どうしようかと、青二は困ってしまった。

が、困ったときには、よく名案がうかぶものである。青二は、机のひきだしをひっぱりだして、ひもを探した。赤と青のんだんだらの、荷物をくくるひもがあった。それを出すと彼はあやしい動物の後足二本を、そのひもでいっしょにぐるぐるしばってしまった。

こうすれば、このあやしい動物は、前足も後足も二本ずつしぼられているんだから、もう歩くことができない。歩くことができなければ、この部屋から、出てゆくこともない。よしよし、これなら大丈夫と、青二はそれがすむと、机の上にそっとおいて、はしご段を下へおりていった。

夕飯のおぜんを、母親とかこんで、いつものように食べた。母親は、放送局にはかわったことがなかったかと聞いた。青二は、なにもかわったことがなく、お父さんは鉛筆を一本くれたと、答えた。

食事がすんだ。

母親が台所の方へいつているひまに、青二は皿の上からたべのこりの魚の骨をそつと掌てのひらへうつした。そして急に立つて、二階へとんとんとあがつていった。

「青二、お待ちよ、りんごを一つ、あげるから……」

母親が声をかけたが、青二は、

「うん。あとでもらうから、今はいいよ」

と、いいすてて二階へあがつた。すぐ机の前へとんでいった。

机の上には、見おぼえのある赤と青とのだんだらのひもと、ゴムのバンドがあつた。気味のわるい二つの目玉らしいものも、そこにあつた。

「にやーお。う、う、う」

「これがほしいんだろう。さあ、おたべ」

青二は、魚の骨を、光る目玉の下へおいてやった。すると、かりかりと骨をかむ音がした。骨がくだけで、机の上からすこしもちあがつた。そしてそれはやがて線のようにつながって、だんだんと上にあがり、それから横にのびていった。

「き、気持がわるいなあ」

青二は、ぞつとした。魚の骨が、動物の口へはいつてくだかれ、それから食道をとおつて、胃ぶくろの方へ行くらしい。それが透すいてみえるのだった。

「ふーん。たしかにこれは見えない猫だ。透明猫だ。なぜこんなふしぎな動物が生きているんだろうか」

青二は、おそろしくもなったが、またこの見えない猫が貴重なものに思われてきて、膝の上のせてしきりになでてやった。

そのうちに、二つの目玉が動かなくなった。透明猫は、膝の上でねむりはじめたらしい。しかしそのとき、青二がふしぎに思ったのは、拾ったときはたいへんはつきり見えていた目玉が、今はぼんやりとしか見えないことだった。

おそろしき事件

あくる日、青二はいつものように五時に起きた。

父親は、まだねていた。放送局から夜おそく帰ってくるので、父は朝おそく起きるならわしだった。

だからその朝も、青二は母親といっしよに朝のおぜんについた。茶の間は、台所のとなりで、光線があまりはいらぬ部屋だった。

「どうしたの、青二。お前の顔は、へんだね。気分でもわるいのかい」
母親が心配そうにきいた。

青二は、べつに気分もわるくなかった。だからそれとおり返えた。

「でもね、青二。どうもへんだよ。なんだかお前の顔は、かげがうすいよ。ぼんやりしているよ」

そういわれても、青二は本気にしなかった。

「お母さんは、あんなことをいつているよ。お母さんの目の方が、今日はどうかしているんでしよう。目がかすんでいるんじゃない」

「あら、そうかしら。もつとも、もう春になりかけているんだから、のぼせるかもしれないからね」

その話は、そのままになった。青二の母親は、朝の用事をまだたくさんもっていたから。青二は二階へあがった。

机の上に、小さい座ぶとんがのせてある。その座ぶとんの上を見るとまん中がひっこん

でいた。そして、ゴムのテープと、赤青のまだらの紐ひもが結ばれたままあった。その座ぶとんの上に、例のあやしい動物がねていることはたしかだった。

だが、ふしぎなことに、二つの目玉は、どこにも見えなかった。

「あの目玉はどこへ行ったんだろう」

青二は、そばへいって、手さぐりで動物をなでてみた。猫の頭にちがいないものが、たしかに手にさわった。

しかし目玉は見えなかった。もしや目玉がなくなったのかと思って、青二は片手で動物の頭をおさえ、もう一方の手で目玉をさぐってみた。すると、

「ふうっ」と、動物はあららしい声をたてて、座ぶとんからはねあがった。

そうでもあろう。いきなり目玉へ指をつっこまれたのでは、びっくりする。

青二の手がひりひり痛いたんだ。見ると、血が出ている。今動物のために、ひっかかれたんだ。

が、このとき青二は、おどろきのあまり、心臓がどきんと大きくうってとまった。それは、なんだか自分の手が、はつきり見えないのだった。ぼんやりとしか見えないのだった。「どうしたんだろう」さつき青二の母親がいったことばが思い出された。「青二、どうし

たの。お前の顔は、かげがうすいよ」と、いわれたのを。

青二は柱にかかっている鏡かがみの前へいつて顔をうつしてみた。

「おやつ」

大きなおどろきにぶつつかった。鏡にうつった青二の顔は、うすぼんやりしていた。校こ服うふくはちゃんとはつきりしているのに、くびから上が、ぼんやりしているのだった。

やっぱり自分も、のぼせ目となったのかと思い、青二は、いくども目をこすって、鏡の中ちゆうにうつる自分の顔を見なおした。

だが、そのかいは、なかった。いくど見なおしても、彼の顔はぼんやりしていたし、両手をうつしてみても、やはりそれもはつきりうつらなかつた。

「えらいことになった」と、青二はその場にうずくまってなげき悲しんだ。

なぜそんなことになったのか、青二には、わからなかつた。あの見えない猫と同じようになふしぎな現げん象しょうが、今自分のからだの上うへにあらわれて来たのだ。

「これからどうなるだろうか。自分もあの猫のように、からだがつかり見えなくなってしまうのではあるまいか。ああ、そうなったら、もう生きてはいられない。自分は化け物あつかいされるだろうから……」

青二は、ここで、重大な決心をしなければならなくなった。このままうちにおいて、化^ばけ物あつかいされるか、それとも誰にも見つかからない世界へにげていってしまおうか。

いろいろと考えなやんだ末……青二は、そつと家を出てゆくことにした。

青二は、わずかの着がえをバスケットに入れ、また片手には、透明猫を入れたふろしき包みを持ち、母親に気づかれないうちに、家を出てしまった。

ただ母親がなげくとかわいそうだと思つたから、

「ぼくは急に旅行をします。心配しないで下さい。そのうちに、かならず帰つて来ます。そして、うんとおもしろいおみやげ話をしましょう」

と、いう遺書を、机の上において去つた。

み^みよ^うふ^くか^み
 妙な福の神

どこというあてもなく、青二は歩きつづけた。

頭には、スキー帽をかぶり、風よけをふかくおろして顔をかくした。それからオートバイに乗る人がよくかけている風よけ眼鏡をかけた。そのガラスは黒かった。

くびのところを、マフラーでぐるぐるまいた。くびのあたりを人に見られないためだった。また両手には、手袋をはめた。

こうして歩いていけば、「あいつは寒がりだな」と思われるぐらいで、とがめられることはなさそうであった。

歩きながら、どうして世の中にこんな奇怪きかいなことがあるのか、またどうしてそれが自分のからだをおそったのであろうかと、いろいろ考えつづけた。

そのうちに、歩きたびれて、青二は小公園のベンチに腰をおろした。

おなかもすいたので、包つつみをあけて、パンを取出してたべた。びんにつめていた水をのんだ。おなかのすいたのが少しなおり、のどのかわきがとまった。

だが、青二はかなしくなった。

「この次の食事から、自分で買って、たべなくてはならない。お金はすこしあるが、一日二日たてば、それもなくなるだろう。それから先はどうしたらいいのだろう」

青二はうちへもどろうかと考えた。

「いやいや、こんな化け物みたいなからだを持って帰ったら、お母さんがなげきかなしむばかりだ。どんなにうちがこいしくても、自分はうちへかえれないのだ」

ぼたぼたとあつい涙が青二のほおをつたつて、膝のうえへ落ちた。

「おい坊や。なにをそんなにふさいでいるんだい」とつぜん声を青二にかけた者がいた。

青二はびつくりして顔をあげた。するとそこには一人の青年が立っていた。ダブルの背広を着、頭髮をながくのぼして、きれいに分けた紳士風の青年だった。しかし服装の小さいなわりに、顔はやけトタンのようにでこぼこし、四角な頬ほほには、にきびがたくさんふき出ていた。

が、青年は、にこやかに笑顔をつくつて、青二を見下ろしていた。

「泣くなんて、男の子のすることじゃないよ。おれだつて引揚げて来たときは泣きたくなつたさ。だけど、泣いたつてしようがないと思つてあきらめて、あとはどんな苦しいことがあつても、にこにこして暮らしているさ。樂らく天主義てんしゆぎにかきるよ。そして困つたら、三日でも四日でもよく考えるんだ。考えて、道がひらけないことつてないよ。坊やお前はうちがないんだらう」

いいえ、と答えようとしたが、青二は今はずちを出たんだから自分はうちなしだ。だから青二はうなずいた。

青年は「そうだろうと思つた」といつて「それから、食うに困っているんだらう」とき

いた。

青二は、やっぱりうなずくしかなかった。

「よおし、心配するな。おれについて来い。お前ひとりぐらいは、たらふく食わせてやる。さあ行こう」

どうしてその青年が、青二にそう親しんせつ切なのか分らなかつた。しかし今はその青年に力を借りるよりほか道がないことが、青二に分つていた。そこで青二は、この青年に、重大な秘密をあかすことにした。

ただし青二は、自分のことは、さすがにいいだすことが出来なかつた。猫のことだけを話したのである。

すると青年六さんは、目をかがやかして喜んだ。

「え、そいつは、すばらしいじゃないか。たいへんな金もうけがころがりこんだものだ。いや……お前、これは大もうけになるぜ。おれに万ばんじ事をまかせなよ。そして利益は五分五分に分けよう」

六さんはすっかり乗り気になった。

「ところでちょっと、その本尊ほんぞんさまというのを見せてくれよ」

そこで青二は、猫のはいつているふろしきを、六さんにさわらせた。

「なるほど、たしかにこの中に、猫みたいなのがはいつているぞ」

「そこで、ふろしきの中をのぞいてごらん」

青二は、ふろしきのはしをすこしあけて、六さんに中をのぞかせた。

「おや、いないね。あら、ふろしきの外からさわると、ちゃんとはいつてるんだが……」

ふしぎに思った六さんは、こんどは手袋をはめた手を、ふろしきの中にさしいれた。

「ありやりや、おどろいたなあ。ちゃんと猫みたいなものからだにさわる。ふーん、やつぱり透明猫だ。インチキじゃねえ。へえーっ、お前はまあ、大した金のなる木を持っているじゃねえか。よし、これなら小屋がけをして、一人十円の入場で、いらつしやい、さあいらつしやい、さあいらつしやいとやれば、一日に二千人ははいる。すると一ン二が二で二万円」

青二はおどろいた。何といい計算の名人だろう。

「二万円はすこし少ないなあ。入場料を二十円にあげる。そのかわりお客をあおってしまふ。ええつと『十万円の懸賞』だとゆくんだ。『もしこの透明猫がインチキなることを発見されたるお客さんには、即金で、十万円を贈呈いたします』と書いてはりだすん

だ。するてえと、慾の皮のつつぱった連中がわんざわんざとおしかけて、十万円とふしぎな見世物の両方につられてどんだんはいる。二十円の入場料だつてやすいくらいだ。まず一日に二万人ははいるね。すると二二ンが四で、四十万円だ。ほう、これはこたえられねえ」

だいけんしょう
大懸賞の見世物

その小屋がけは、六さんの顔がすこしはきく、ある盛り場さかにたてられた。

「現代世界のふしぎ、透明猫とうめいねこあらわる」

「これを見ないで、世界のふしぎを語るなかれ」

「シー・エッチ・プルボンドンケン博士曰く、透明猫は一万年間に一ぴきあらわれるものである」と

「インチキにあらず。ちゃんと生きています。インチキを発見された方には、即金で金十万円也を贈呈ぞうていします。透明猫普及研究協会総裁村越六磨敬白」 六さんはえらい名前までこしらえて、でかでかと、とびらにはり出した。

こいつは、はたして大あたりだった。二十円をはらって入場者がはいること、はいること。

「大入満員おおいりまんいんにつきしばらく客どめ。そのあいだ、ここに出してある透明猫いけどりの大冒険だいぼうけんの図をごらんなさい。こっちにあるのは、透明猫のいつわりなき写真でござい。今見おとせば、末代までも話ができん。さあ、いらっしやいらっしやい。いや今しばらく大入満員の客どめだ」

六さんは、ものものしいかつこうで、さかんに小屋の前にあつまる群衆をあおりつける。場内では、青二が、これまた太夫たゆうの服を着、顔と手足とのどはかくし、きれいにかざりたてた小宮殿のような透明猫のはいった箱のそばに立って、つめかける客の一人一人に、箱の上の穴から手を入れさせ、透明猫をなでさせるのであった。

猫はねむいところを、たくさんの人々になでられ、毛をひっぱられ、つかまれるので大むくれ。箱の中をあばれまわって、ふーっ、きやあーっ、と、うなる。

それがまた客の人氣にかなった。まだ順番のこない客たちは、箱をのぞきこんで、猫の声はすれど、その姿がさっぱり見えないのに興味をつのらせる。

これは魔術まじゆつではないかと、箱の中を隅すみから隅までさぐるお客も多かった。そういう人

は、透明猫のために手をひつかかれたり、ごていねいに指の先をかみつかれたりして、おどろいたり、感心したりで引きさがるのであった。

初日の入場料のあがり高は、四十五万円もあつて、六さんの胸算用をはるかにとびこした。

「まあ一万円とつときねえ、おれも一万円とる。これは今夜のうちに小づかいに使つちまつていいんだ。のこりの四十三万は、銀行に積立てておこう。毎日こんなにはいるんじやあ、さつで持つていては、強盗にしてやられるからねえ。そして貯金が一千万円ぐらいになつたら、ここへすごい常設館をたてて、大魔術とサーカスと透明猫と、三つをよびものにして、ここへ遊びに来る人の金をみんなさらつてしまふんだ」

六さんは、えらい鼻息であつた。そしてその夜、青二をつれて、近所の奥まつた家へつれこんで、すごいごちそうを注文し、酒をもつてこさせて、大宴会をやつた。

六さんの体に酒が入ると、急にことばがからんで来た。

「やいやい、坊^{ぼう}や。なんだつてお前は、まだ帽子をとらねえんだ。おれを甘くみてやがるとしようちしねえぞ。こら、帽子をとれ。手前はこの総裁六さん——じゃあねえ、何とか六磨のアソンを何と思つてやがるんだ」

そばにいた女たちが、六さんをとめたけれど、六さんはどうとう青二におどりかかって、その帽子をひったくってしまった。

「ああつ——」「きやあ——」えらいさわぎが起つた。

六さんは一ぺんに酒のよいがさめてしまふし、女たちは悲鳴の声をひきながらその座敷からにげだした。

なぜ。青二の帽子の下には、なんにもなかつた。首のない青二が、そこにめいわくそうに動いているだけだつた。

六さんは、腰をぬかしてしまつて、口をぱくぱく開くがひとこともいえなかつた。

さて、その夜のさわぎもどうやら片づいて、六さんと青二は、そこを引きあげた。そのとき六さんは、口どめ料として、そのうちへ五万円を出した。

二人はホテルへとまつた。

六さんはベッドの上で、青二に相談をかけた。どうだ青二も透明なものなら、透明猫の見世物よりも「透明人間あらわる」の方が、人がたくさん集まるから、青二が思い切つて見世物になるようにすすめた。

「いやです。ぼくはいやです」

「ばかだねえ、お前さんは。こんなすばらしい儲け口は又とないよ。どうやすく見つもつても億円のけたのもうけ仕事だ。それをにがす法はない。さあ、透明人間でやってください」

下からおがまんばかりに、六さんはくどいた。しかし青二は、しうちしなかつた。

その夜はそのままとなり、次の日の朝が来た。青二はベッドから下りて背のびをしたが、ふと、となりのベッドを見ておどろいた。

なんとということだろう。たしかに六さんと思われる人物が、そのベッドの上にねむっていたのであるが、顔も手足ももうろうとしていた。そして大きな二つの眼の玉だけが光っていた。六さんも透明人間とうめいにんげんになりつつあるらしい。

さわぎはその日に全市へひろがった。

それはあつちでもこつちでも、人間がかげがうすくなる事件、だんだんからだが消えて見えなくなつてゆく事件が発生して、大さわぎとなつた。

そういう人たちは、しらべてみると、みんな前の日に、「透明猫」のみせもの見世物を見て、そのあやしい猫にさわつた者ばかりであつたが、そういうことがはつきりするには、それから五日もかかつた。

その間に、全市の透明人間は、ますますかすがふえていった。透明になった者が誰のからだにさわれると、かならずその人のからだかやがてもうろうとなつて透明化することが分つた。つまり伝染性があるのだ。

大きな恐怖がひろがつていった。だが、このさわぎは、事件発生後七日目に急に解決することとなつた。

というのは、はじめの「透明猫」をつくつた羽根木博士という学者が、その筋へ名乗り出たからである。

博士の研究は、肉体の透明化にあつた。からだを、空気と同じ反射率、屈折率くっせつりつをもたせることにあつた。博士は、かびの一種が、そういうことに強い働きのあることを発見し、自分の研究室でそのかびを培養ばいようしては、いろいろな虫やモルモットや猫に植えていたのである。

例の猫も、前足と後足とをそれぞれしぼり、かびを植えた直後だったが、その後足のひもがとけたので、研究室から外へにげだし、崖の下へおちた。そのとき青二が通りかかつて猫を拾つたわけだ。

しかし青二は猫にさわつたので、青二もまた透明になつた。見世物小屋でこの猫にさわ

つた連中も、みな同じことだった。博士は、そのかびを殺す薬を用意していたので、それを注射することによって、透明人間たちはみんなもとの不透明にもどることが出来た。

青二も今はうれしく自分の家へもどることができた。六さんも心を改め、もうけをほんとうに山わけにした。青二のお母さんも、青二がもどってきたので大よろこびであった。のこる問題は、羽根木博士の研究のことであるが、博士は今まで発見していなかったこの研究の結果を、どういう方面に活かして使おうかと、今、考え中だそうである。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第13巻 少年探偵長」三一書房

1992（平成4）年2月29日第1版第1刷発行

入力：海美

校正：もりみつじゅんじ

2000年1月22日公開

2006年7月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

透明猫

海野十三

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>